

教育大學新聞

東京教育大學新聞会

号外

きにことは文教授会を廊下で見

守る斗争でしかなかつた。しか

しその文教授会が自ら六・一〇

決定を正当と斗なし、文部省交

歩を認めた現在、我々は徹底し

た教授会への譲歩を行ふことに

教授会

田文勝ち取れ

二十日文学部はストライキ体制に入
し、午前中合同クラス討論を含むクラス
討論、集会、学内デモが展開された。し
かし、その昨日の運動をみてみるならば
我々は大きな弱虫を指摘せざるを得ない。

昨日の斗争は、四年間の、學問の発展
段階の相違に根ざした各学部工ゴイズム
基く教授会相互の妥協工作に決着をつ
いた。我々自身が筑波両趾に主体的に参加
せず立ちあがつた歴史的な日のはずであ
つた。そして、筑波土地確保を決定し
た六・一〇評議会決定の白紙撤回、その
ものの評議会団文が当日の獲得目標であ
った。しかし、その結果は、學長はじめ全
員にその要求をつきつけることができ
ず、そしてこのことさえもが全員の中
に。明らかにされることなく、終始一貫し
我々は獲得目標を喪失したまま、是生

前の座り込み——ムード的なストを長
時間するにとどまってしまったことを先ず
確認したい。そしてそれはまた、筑波両
趾を「秘密裏に行われた、非民主的に決
定されたり」という外在的批判から討論す
ることによって、それ故に、丁度学部は
公明地が欲しい。現在調整案撤回を要
求することは、客観的、筑波移転を断念
することになる。といふ文學部反対論
の研究室と国都市との間か、その中で大学
三人が座れることが予想される。我々は、
筑波両趾を「現実社会」が要請してい
たうえ、いつ内在的批判を通じてこそ、
何らかの意志表示が可能であると考え
えた。

教育六月も入ト突入

教育学部学生太会は二十日十時より合
併教室で開かれ、委任状三一を含む三百
名の出席で成立しE。試験費成一五二
人、二三七可決、本日からストに入る。

六月二六日調整案を

承、二二二議会未定默

田文勝ち取れ

——なしには筑波斗争の展望は語り得な
い。丁団文は非合法、民主的教授を敵に
する」という論理に対し、我々はストで
斗うことにより、すでに現存の大学の秩
序を否定したこと、現存の大学内の教授
会という機構と訛別しにことへ個々の教
授の人格は別次元)を主張し、我々の斗
争を三日間の工ヒソードに終息させるこ
となく、最大限のへ今後左斗うべく、本
因の教授会団文を断固実現することを主
張する。